

文化動態研究ユニット公開研究会

行動論からの心身論 へのアプローチ

日時：2008年12月14日(日) 14:00-18:00

場所：東京外国語大学 AA研 3階 301号室

● プログラム ●

発題 1: 細馬宏通 (滋賀県立大学)

「体験を語る身体：観察者の視点と体験者の視点」

発題 2: 広瀬浩二郎 (国立民族学博物館)

『手学問のすゝめ』の誕生："さわる"体験型ワークショップがめざす
フリーバリア社会」

全体討論

司会：亀井伸孝 (AA研)

発題 1: 細馬宏通 (滋賀県立大学)

「体験を語る身体：観察者の視点と体験者の視点」

■発表要旨

ジェスチャー研究では、日常会話のジェスチャーにおいて、語られている世界と語り手との関係には二通りあるとされてきた。一つは、目の前に小さな世界を作って、そこを見下ろすように手を動かしていく「観察者視点ジェスチャー」、もう一つは、語り手自身が物語の中の登場人物となり身体全体を動かす「キャラクタ視点ジェスチャー」である。本発表では、洞窟探検者が自身の経験を語るときのジェスチャーを例に挙げながら、身体動作と視点がどのようにダイナミックに変化するかを分析する。その上で、「観察者視点/キャラクタ視点」という従来の分類を再考する。

■講師略歴

細馬宏通 (ほそま・ひろみち/滋賀県立大学・准教授)
1960年西宮市生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程修了(理学博士：動物学)。現在、滋賀県立大学人間文化学部人間関係学科准教授。専門：コミュニケーション論、メディア史。
著書に、篠原和子・片岡邦好編『ことば・空間・身体』(ひつじ書房/共著)、串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話(文と発話第一巻)』(ひつじ書房/共著)、『絵はがきの時代』(青土社)ほか。

発題 2: 広瀬浩二郎 (国立民族学博物館)

『手学問のすゝめ』の誕生："さわる"体験型ワークショップがめざすフリーバリア社会」

■発表要旨

2007年10月、慶應大学において「手学問のすゝめ」ワークショップが開催された。それから1年余、私は各地で"さわる"体験型ワークショップを企画、実施している。本報告では「手学問」のキーコンセプトである三つの"こう"(考・交・耕)について概説し、「さわる文化=触文化」の意義を確認したい。全盲者のユニークな触覚(五感)活用術が視覚優位の現代社会にどのようなインパクトを与えうるのか、そして触覚情報に依拠する研究はどこまで可能なのか。参加者のみなさんと無謀と野望に満ちた有意義な議論ができれば幸いである。

■講師略歴

広瀬浩二郎 (ひろせ・こうじろう/国立民族学博物館・准教授)
1967年、東京都生まれ。13歳の時に失明。筑波大学附属盲学校から京都大学に進学。2000年、同大学院にて文学博士号取得。専門は日本宗教史、障害者文化論。2001年より国立民族学博物館に勤務。
主な著書に『障害者の宗教民俗学』(明石書店、1997年)、『触る門には福来たる―座頭市流フィールドワーカーが行く!』(岩波書店、2004年)などがある。

★★★ 本研究会は公開で行っております。お誘い合わせの上、ぜひご参加下さい。★★★

お問合せ：AA研 研究協力課全国共同利用係 TEL 042-330-5603 FAX 042-330-5610 Email kenkyu-zenkoku@tufs.ac.jp